

アフリカで「間」を考える

小原 秀雄

おぼら ひでお / 1927年東京生まれ。女子栄養大学名誉教授、(財)日本自然環境保護協会元理事長・現在顧問、野生生物保全論研究会(JWCS)会長、共生社会システム学会会長ほか。主著に『レッド・データ・アニマルズ(共編全9巻)』(講社)『現代ホモ・サピエンスの変貌』(朝日新聞社)『人類は絶滅を選択するのか』(明石書店)など多数。

わたしの行きつけの店ならぬ「ロッジ」が、ケニヤのヴォイ・サファリロッジである。二〇年近く毎年、半月から一カ月、滞在している。大きな岩などを利用し、水場などを設定して人間界との「間」の働きでサバンナの野生動物界が見渡せるからだ。東部から南部まで方々のアフリカの野生動物界を訪れたが、小高い丘にあるこのロッジは、大はアフリカソウから小はコピトマンガースまで、肉眼でさまざまな種の行動や生態が一望できる。

人間界と基本的にすみわけて、「間」を作っている野生動物とちがいが、ヒヒとハイラックスの二種の動物だけは、このロッジで人間と独特の間柄である。それを見ながら、わたしは最近「間」についていろいろと考えている。

ハイラックスはもともとロッジの建った岩山に住んでいた。建物ができて、それを岩とみなしてか、すき間などに入り込み、適応した。小型なのが幸いし、生活空間を別にしたのである。ヒヒは夜間、岩山の木々を眠り場にするなどしていたが、行動能力が高く、今は人間との「間」を巧みに調整している。観光客の側も餌を与え、馴化しかけている。部屋に入り込んで食べ物奪うなど、人間との「間」に安定した調整ができて

いないままである。動物が食物獲得に適應するのは一般に驚くほど速やかであるが、人間の側の問題も多

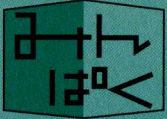
トラブルは絶えない。安定するまで時間がかかる。人間の側に広い空間があり、時間をかければ動物は習得する。それが日本のように人間界が野生動物界と接しているところは、クマの事例のように新しい「間」を設ける必要を示している。野生動物が安心できる空間が充分ある地が、今まだアフリカの一部にはある。

「間」については五〇年余り前に、スイスの動物学者ヘデイガーが「臨界空間」の概念を提起した。詳細は省くが、動物が逃走や反撃行動をするのに、「間」をとる距離で、各種動物や個体の生得的調整能力であろうか。

一方、飼育される愛玩動物や飼育動物は、人間中心の「間」に適應していく。野生動物の方は、殺されたりしながらも、ときとともに人間との「間」のとり方ができるかが心配である。現代の動物行動学にはヘデイガーの遺産は生かされるのだろうか。

唐突かも知れないが、新しい知が現代の自然科学や社会・人文科学の総合再構成に必要なことを考えさせられている。生きている動物や人間のあり方、それらを知るうえで現代の学問や認識の間に溝やすき間があるように思えてならない。

月刊



目次

APRIL 2007 4
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
アフリカで「間」を考える
小原 秀雄

02 特集 森

森と人
佐々木 史郎
日本の森世界
山田 勇
森と文明
安田 喜憲

フィンランドの森
庄司 博史

コンゴの森の民
市川 光雄

08 モノ・グラフ
主張する美術作品
久保 正敏

10 開館30周年にあたって
松園 万亀雄

11 表紙モノ語り
ニヴフの狩猟用革帯
佐々木 利和

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
ある僧侶とのかかわり
—北タイの村での15年—
馬場 雄司

15 人生は決まり文句で
山に雪が、人に齡が
小長谷 有紀

16 外国人として生きる
国際結婚移住者の「声」
横田 祥子

18 地球を集める
チンド かめ サンヨ
珍島の墓と喪與
—館外の研究者との共同収集—
朝倉 敏夫

20 生きもの博物誌
コタケネズミと焼畑民
竹田 晋也

22 フィールドで考える
また、夏がめぐってくる
高橋 絵里香

24 開館30周年記念 特別展
聖地・巡礼—自分探しの旅へ—
次号予告・編集後記